



中京大学 学長  
安村 仁志

やすむら・ひとし氏  
1947年生まれ  
1974年 大阪外国語大学大学院(ロシア語学専攻)修士課程修了、中京大学教養部講師  
1984年 教養部教授  
2008年 国際教養学部教授  
教養部長、研究所長、図書館長、副学長など歴任。  
2015年 中京大学学長  
専門はロシア正教会史

学術とスポーツの殿堂として、しなやかに挑み続ける

スポーツマンシップと進取の精神

本学は、1923年に梅村清光が開校した中京商業学校がルーツです。1951年に梅村学園を設立し、1954年に中京短期大学を開学、2年後4年制大学(商学部)になり、1959年に中部圏で初の体育学部を設置しました。2000年には日本初の心理学部を設置する等、時代の流れを見ながら他に先駆けた学部の設置・改組等をどんどん行う、進取の精神がありました。現在は、11学部、1万3000名の学生を擁する、中部圏最大級の総合大学に発展しました。

建学の精神「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」は、水戸藩に仕えた梅村家に受け継がれた水戸学の「文武不岐」の精神に基づきます。「真剣味」の真は真理の探究(知育)、剣は当時のスポーツに当る剣道の剣で、健康の増進・肉体の鍛錬(体育)、味は人間味の味で、ジェントルマンシップ・レディシップの醸成(徳育)を意味します。スポーツの場ではスポーツマンシップの体得を目指し、①ルールを守る、②ベストを尽くす、③チームワークをつくる、④相手に敬意を持つ一をその四大綱に掲げ、全人的教育の普遍的基盤としています。

スローガンは「大学の主人公は学生」

私が副学長の時の2012年、前学長のもとにこの先の中京大学の課題を練るため、将来構想研究会が立ち上がりました。そこで改めて、総合大学としての、建学の精神に立った「中京大学の理念」を定めました。研究と教育、学術とスポーツを調和させた、躍動的で真剣味あふれる学びの殿堂となること、社会の多様な課題に挑み、社会に貢献する人材育成を目指すことといたしました。

2015年の学長就任に際しては、「大学の主人公は学生である」をスローガンに掲げました。学生が能力を伸ばす場を提供するためには、教員の教育力を高めなければなりません。その数年前、FD(ファカルティ・ディベロップメント)の義務化もあり、初代FD委員長を務めましたが、教員が疲れるFDにはしたくないと考えました。そこで、「FDは大学のすべての者の《幸せ》のため」とし、そのため全構成員がそれぞれベストを尽くす「For Doing our best!」をスローガンにしました。良い授業が行われれば学生の満足度が上がり、教員も職員も充実感を得られる、そういうものにしようと思ってきました。

また、入学から卒業までしっかり教育する一環とし

て、卒業する前に自らの大学での学びを締めくくり、社会に出る備えをするための、4年生を対象とした「教養探究ゼミ」を開講し、私も担当しています。学部のゼミとは別の、様々な学部の学生が共に学ぶゼミです。また、学生の声も聞きたいと願い、できる限り昼ご飯を学食で食べ、学生たちと会話する機会を持つようになっています。

中京大学長期計画「NEXT10」

開学60周年を迎える2014年には、数年間全学を挙げて取り組まれた中京大学長期計画「NEXT10」が策定されました。基本方針として「しなやかに挑み続ける新生・中京大学」が掲げられました。多様化する社会でワールドワイドに活躍するためには、変化に対応する柔軟性を身につけてほしいという思いを「しなやか」に込めました。

NEXT10は、①(教育分野)自ら考え、行動するしなやかな知識人を育成する、②(研究分野)研究力を強化し、中京大学を飛躍させる、③(社会連携分野)地域の交流・連携の核となる、④(国際化分野)世界をキャンパスに、キャンパスを世界に、⑤(卒業生連携分野)世代を超えるChukyoアイデンティティーの5つの骨子と、それらを具現化するための10の推進事項で形成され、そのもとに多くのプロジェクトが立ち上げられました。

一端をご紹介しますと、教育の面では、大学全体の課題を議論する場として、教育構想会議を設けました。学長が会議に取り組むべき課題を諮問し、答申をまとめていただき全学で確認した上で、関係部署に指示していく体制です。メンバーは副学長を議長に、各学部委員、職員で構成され、その下に部会が設けられています。

このほか、私学ですので大学の歴史等中京大学を知る自校教育を科目化するプロジェクト、奨学金・授業料減免プロジェクト、学生支援システム構築プロジェクト、教学ガバナンス見直しプロジェクト等も設けました。大きかったのは教育・研究にかかわる予算制度プロジェクトで、それまでの分配基準を廃止して、各学部が教育上真に必要なとする予算を組む概算要求方式とし、研究費も一律配賦方式に代わり、研究実績に基づきメリハリをつけるようにしました。

教職協働の加速

しなやかに挑み続けるうえで重要なのは教職員の姿勢です。受験者数も就職率も安定している、何もなくてもこの先も何とかかなと思うのが一番危険です。

教職員全員が同じ方向を向くようにするのが学長の仕事ですので、学部長懇談会、副学部長懇談会、研究科長懇談会を随時開催し、取り組むべき課題を伝達しています。また、教職協働を重視し、教職員双方が今どんなことを課題とし、検討を進めているかを知る必要があるので、部長会、課長会、そして現場の最前線で学生と接している係長・主任会を開催しています。現場の問題や意見を聞き、大学の方針などを私が説明する場となっています。また、今年度から学事・SD(スタッフ・ディベロップメント)担当学長補佐、また、3つの学部の副学部長に行政職員が就き、教員との橋渡しだけでなく、教員・職員が協力して、教育の質保証・研究の一層の充実を行う体制を構築しました。

100周年に向けて

2023年の学園創立100周年に向けて、学園全体で国内外にさらに存在感を高めるのが大きな目標です。2020年4月には新学部(国際学部)を設置する予定です。1年次に1 Semesterの留学を経験し、国際学の学びのベースとなる実践的英語力を習得し、世界的視野と確かな語学力をもって「人文科学」と「社会科学」にわたる専門の知識・能力を複合的に身につけ、政策立案のできる人材を育てることを目標にしています。これからもさらなる発展を目指し改革を続けていきます。また、改めて本学のブランド力を確かめ、高めるべくプロジェクトを立ち上げているところですが、これまでに培われてきた本学の学生の明るく、積極的で、精神的にタフだという面は大事にしていきたいと考えています。これらは、まさに多様な国際社会を生き抜くのに必要な能力で、たとえ偏差値が上がったとしてもそういう面が減退しては本学の特色もなくなります。初期の体育学部には全国から学生が集まり、それが学内の活気につながっていました。今は県外出身者が少し減っており、残念です。そこで全国の校友会支部など卒業生と連携し、奨学金制度も増やすなどして、100周年に向けて全国及び海外からも意欲溢れる学生がさらに集い、何事にも果敢に挑戦していく進取の精神をもった人材を多く育成していきたいと思えます。学生に負けないよう、大学をますます発展させるべく、学生-教員-職員が一体となって努めてまいります。

大学を取りまく厳しい状況もたくさんありますが、教育はロマンです。夢をもって、わくわくしながら大学運営を行いたい、そうロマンチックに、と思っています。

